

表現を味わい、豊かに想像しよう

# 「やまなし」

筑波大学附属小学校 白石 範孝

## ■作品をまるごととらえる力

これからの文学的文章の読みの学習を考えてみると、さまざまな学習の方法が考えられるであろうが、その中の一つの方法としてわたしは、「作品を丸ごととらえ、読みの方法を学ぶ」という視点で学習活動や指導内容を考えていく必要があると考えている。そして、作品を断片的にとらえ読んでいくのではなく、丸ごととらえるために作品の構造をとらえる方法を子ども自身が身につけ、学年が上がるにしたがって自力で作品を読み、作品を楽しく読んでいけるようにしたいと考えてきた。

読みの方法には、さまざまな言語技術を挙げることができるが、大切なことはその教材の中でどのような読みの力を取り上げるか、教材で何を教えるのかを明確にする必要がある。そして、この学習によって得た読みの方法を子ども自身がほかの作品の読みに生かすことができるようにする学習を設定する必要があると考えた。

①～⑩という順番で10の観点を挙げてきたが、これはいつでも同じではない。作品によっても、読みの過程によっても子どもがやりやすいところから取り組めるようにしている。また、最初のころは、どの作品も10の観点で読んでいたが、徐々に子ども自身が10の観点から読みの方法を選択して読みを進められるようにしてきた。

## ■単元の指導計画（総時数14時間）

### 第一次（第1～4時）読みの方法を「知る」段階

①「読みの10の観点」から教材『お手紙』（二下）を読み、読みの方法を知る。

### 第二次（第5～10時）読みの方法を「使う」段階

読むことのおもしろさを広げる 1

①「読みの10の観点」から教材『やまなし』（六下）を読む。

②「一文で読む」ことから、題名のもつ意味を考える。

③資料「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方・考え方を知る。

### 第三次（第11～14時）読みの方法を「広げる」段階

読むことのおもしろさを広げる 2

①「読みの10の観点」から宮沢賢治のほかの作品を読む。

## ■「一文で読む」方法で『やまなし』を味わう

物語を読むということは、中心人物の心の変容を読むことで

子どもたちが作品を丸ごととらえる方法として、わたしがこれまで継続した学習を進めてきたのが「一文で読む」という方法である。「一文で読む」というのは、「が」によって（になる）話」という形で中心人物の心の変容を一文で表現できるように読んでいくことである。この「一文で読む」活動をさらにグレードアップさせるためには、より多くの情報を集めるための読む活動が必要になってくる。この情報を集めるための読む活動が、「一文で読む」方法を含んだ「10の観点から読む」という読みの方法を習得する活動である。その内容は以下のようなものである。

## 10の観点から読む

- ① 登場人物はだあれ？
- ② 中心人物はだあれ？
- ③ どんなことが起こったか？
- ④ 話の中で変わったことは？
- ⑤ 話の中でいちばん大きく変わったことは？
- ⑥ いったい何か？
- ⑦ 場所はどこ？
- ⑧ 一文で書くこと？
- ⑨ お話の図？
- ⑩ 心に残る文、言葉

あると考えている。

中心人物の心の変容をつかむために、作品の読みを「一文で書く」という方法を使った学習活動を行った。

「が」によって（になる）話」という形で中心人物の心の変容を書かせていく。この活動は、読みの学習の終盤で子どもたちがどのように読んだのかをまとめる学習として行ってもいいが、導入の段階で子どもたちの読みの実態を把握するために書かせることもできる。導入段階で行った場合は、この読みから、細部への読みの学習へと進めていくことができる。

本実践においては、「10の観点」で自力読みしたあとで、「五月」の場面と「十二月」の場面を「一文で読む」活動を行った。「が」の部分には中心人物を入れ、「によって」は中心人物が変容するきっかけとなる出来事を書かせる。そして、「（になる）（する）話」には、中心人物が変容した姿やここから分かる作品のテーマなりを表現させる。この活動によって、中心人物の変容の過程をつかむこととなる。

この読みの方法は、作品を丸ごと読み、作品の中の変容をとらえていくことになる。さらに、この方法を皆の共通の土俵としていくことで、作品の題名の意味（テーマ）を探っていくことにつながる。

交流の場においては、各自が表現した「一文」を共通の話題とし、子ども自身が友達とのかかわりの中で読むことの楽しさを広げることができた。

## ■一人一人に確かな「読みの力」を身につけさせる実践事例 ねらい

○作品の読みを「一文で書く」という方法を知り、自分なりに表現することで作品の題名（テーマ）に迫る読みの方法をとらえることができる。

○友達とかかわることさまざまなものの見方・感じ方・考え方に触れ、自分の考えを見つめ、広げることができる。

### 学習の流れ

①最初と最後の一文にある「青い幻灯」に目を向けさせて全体構成をとらえさせ、作品全体の構成を確認する。

・最初と最後の一文による額縁構成をつかませ、その中の五月・十二月の二つの世界の構成をとらえさせ、「青い幻灯」の持つ意味に関心をもたせる。

②「読みの10の観点」の中から「一文で読む」方法を使って、五月と十二月の世界を表現する。

・一文で書くために次のような文型を与え、全員が表現できるようにする。

が

によって

する・になる話

子どもたちは、次のような内容の文を書いてきた。

### ○五月の世界

- ・かへの兄弟が かわせみが魚を捕ったことによって怖さを知る話
- ・かへの兄弟が かわせみがしたことを見ることによって 自然の怖さを知る話
- ・かへの兄弟が 魚がかわせみに捕られたことを知ることによって 怖くなる話

### ○十二月の世界

- ・かへの兄弟が やまなしが落ちてきたことによって やまなしのおいしさを知る話
- ・かへの兄弟が お父さんにやまなしのことを聞くことによって そのおいしさを知る話
- ・かへの兄弟が やまなしの話を お父さんに聞くことによって やまなしがありがたいものであることを知る話
- ・かへの兄弟が やまなしの話を聞くことによって 幸せな気持ちになる話

この活動によって、二つの世界で起こった出来事をとらえることができることに、そのことによって、中心人物である「かへの兄弟」の心の変容をとらえることができる。

子どもたちの中には、何がきっかけとなって、中心人物がどのように変容したかをとらえられない子どももいる。このときには、中心人物はすべての子どもがとらえることができるので、それぞれの場面で出てきたものは何かを明らかにしていくことと、それによって、中心人物がどんな心になったかを問うとして子どもに投げかけてとらえさせていくようにする。

③作品全体を一文で表現することによって、中心人物の変容に気づかせる。

・五月と十二月の一文から作品全体を一文で表現し、この作品のテーマに気づかせていく

- ・かへの兄弟が かわせみややまなしによって 自然の中のいろいろな出来事を知る話
- ・かへの兄弟が かわせみややまなしのを知ることによって 自然のきびしさややさしさを知る話
- ・かへの兄弟が かわせみややまなしのを知ることによって 大きくなる話

この段階では、ほとんどの子どもが中心人物と出来事のキーワードとなる「かわせみ」と「やまなし」に気づいて表現することができるが、最後の変容の様子をとらえられない子どもも出てくる。このときには、②の活動で書いた一文を参考にし、て考えさせるようにしていく。

二つの場面は、変容の内容が対照的であるために表現できないので、二つの表現をくくる言葉にはどんな言葉があるかを考えさせていくと、「自然のきびしさやうれしさややさしさ」という言葉が子どもたちの中から出てくる。

④教材全体の一文から、題名『やまなし』の意味を考えることができるようにする。

・題名の意味を考えることから、作者である宮沢賢治の生き方・考え方に関心をもたせる。

この活動においては、「題名となっている『やまなし』は、十二月の場面に出てくるだけなのに、どうして題名となったのか。」という投げかけによって、子どもたちに考えさせていく。このとき、題名になる言葉には、どのようなものがあるのかを子どもたちにとらえさせる必要がある。「作品の山場」「作品のテーマや主題に関係のあるもの」「中心人物」等を子どもにとらえさせる。そして、この作品の題名はどの意味を含んでいるのかを考えることができるようにしていく。その思考過程で子どもたちは、作者「宮沢賢治の生き方・考え方」に気づいていく。